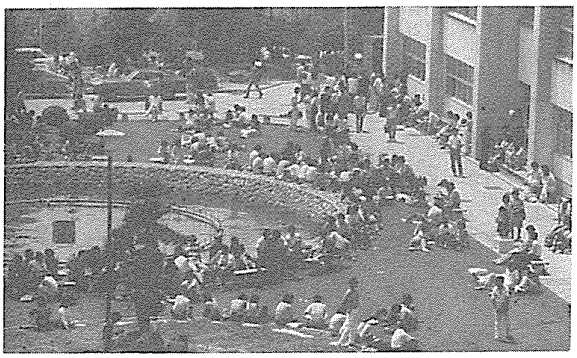
京都産業大学新聞
編集発行
京都産業大学新聞局
BOX　703

青春時代における就職の意味

特集　座談会
学生の就職意識



現在約三百万人の人が大学に籍をおいている。数量的にみれば確かに「大衆化」がなされたと言えるかもしれないが、その内容が問われるとなれば「大衆化」の真の意味を再度考えてみる必要があるだろう。マスコミによる最近の大学に対する評価といえば、「レジャーセンター」とか「サラリーマン養成所」あるいは「現代社会で最も暇な人種が集まるところ」といった痛烈なものまで様々であるが、これら評価の根底にある大学に対する社会の認識は、かつての研究機関、学問追求の場としての性格から明らかに質的な変化が生じ、現在もその過程にあるということであろう。問題となるのは、こういった質的変化がどのような社会的時代的背景から生じたのかまたその中でわれわれ学生自身はどういった認識を持っているのか、ということである。今回、産大生四人の方に集まってもらい、この問題について討論して頂きました。以下はその内容です。

出席者（仮名・発音順）
新見一夫（外3）
北山義雄（理3）
中山公子（済3）
白藤正和（法3）

「何の為に大学へ」

編集部（以下E）先ずはじめに、皆さんは産大生になられて三年目なんですが、入学した頃を思いかえして頂き「何の為に大学に入ったか」という、今更という感じですが、この質問から始めたいと思います。新見君どうですか。

新見（以下A）ぼくの場合は、高校で英語が好きだったし得意科目だったので大学でも英語を勉強してみたいと外語を受けたんですがもう一度冷静に思いかえしてみると、高卒ですぐ社会に出るのがどこか怖いところがあった様に思います。

北山（以下B）ぼくもそういうところがありました。それと高校で出来なかったことが大学で出来る気がしました、まだ何かやることが残ってるという感じでした。漠然とですが……。

中山（以下C）わたしはどちらかというと、余り目的意識というものはなかったみたいですね。なんとなくというか、まわりの人が進学するので、わたしも、という感じでした。

A　たしかに社会に出るのが怖いというのもそういうところに原因があったかも知れません。

白藤（以下D）そうですねぼくの場合なんかもそういうところがあって、即社会より大学でいざ就職する時に、自分に適した職業を選べる様に、それだけの社会的な知識を身につけておきたいと考えましたね。それには何かと法学部が有利なのではないかと思ったわけです。

E　なるほど、AさんとDさんは一定の目的を一応持って大学へはいった、ということで、BさんとCさんはこれからやろうと定まった目的を持って大学に進んだという意識は余りなかったということなんですが、もう少し堀り下げて言えばどういうことでしょうか。

C　つまり、中学から高校へ進む時もそうなんですがあの時も生徒のほとんどが進学する中にあって、自分だけが進学しない、あるいは就職するということは考え難かったし、特別働く必要もなかったわけです。それに、中学の次は高校、そして大学というふうに一本レールがひかれていて、その上を進んでいくものと思い込んでいました。今もそういった意識はあります。だから何かしようと思って大学にはいったのではなくて、はいってから何をやろうか考えるって感じでしたね。

B　そうです。とにかく、まだ社会に出て働く前にやりたいことがある。つまりその為の時間的なゆとりが必要だったということです

E　ということは、学部には別にこだわらずに、別段就職に有利だとか、特定の学問をやってみたいとかいうのではなく、とにかく何か自分自身で納得のいくものを四年間で把みたいということでしょうか。で、皆さんはこれまでやってこられたと思うんですが、二年間どうでしたか。

A　先にも言った通り、英語がやりたくて大学へ進んだと思ったんですが、大学にはいるには他の教科もやらなければ試験はパスしない、そこでカタチだけはつけて大学にはいって、これでやっと受験英語から解放されて、生きた英語を学べると思って二年間やって来たわけですけど、振返ってみると、どうもも一つピンとこない様です。というのは、たしかに高校でやる様な文法的解釈のみに重点を置くといったことは大学の講義では少なく、小説などそれの内容に触れて、作者の考え方、生き方などまで考察する対象を拡げていくところに重点を置いていますが、もう一つゆったりと、じっくり考える講義というものがないように思います。それは一つに、やたらと科目数が多くて、それ、それの題材についてとことん考えてみる時間的ゆとりが持ちにくい、だから与えられた教科書をただ機械的に、受け身にこなしていく、これはもう中学、高校と同じです。

D　外語はたしかに科目数が多くて、そういった状況になり易いかも知れませんが、本来、中学、高校、大学を問わず学生と名のつくものは学問するといった時全く受け身的態度というのは許されないと思います。積極的に自ら研究対象を求め、講義をその資料にするのでなければならないと思うのですが、その意味で、現状としては、入試という一つの目標に向かう手段としてしか学ぶ意味が問われないで、大学にはいってから衣替えの時節とともに、喫茶店ではアイス・コーヒーの出番がなくなり、ホット・コーヒーが来るようになる。その喫茶店の場所としては待ち合わせの場所はどこにしたらいいでしょうか？電子音の中でモカの香りが楽しめるだろうか？？？

そして、どうすれば一万点をマークできるのか？

（二面へつづく）

昭和54年5月19日

学生部長殿

京都産業大学志学会
執行委員会
委員長　牧野　能憲

要望書

去る5月11日読売新聞夕刊に京都産業大学において不正入試の疑惑ありと報道されました。

我々志学会執行委員会は京都産業大学の学生の代表としてここに事件の説明及びその後経過を発表して頂くことを要望致します。

去る五月十一日、読売新聞の夕刊に「京都産大で裏口入学？」（「」及び・は編集部が付けたものです）という大きな見出しで、産大の不正入試の報道がされました。

これより後の、五月十九日、志学会執行委員会が、学生部長宛に、今回の事件の説明及びその後の経過の発表を求める、要望書を提出致しました。また、この要望書に対する大学側の回答が、五月二十五日、学生部長を通じて、出されました。この回答の内容は、三項目のものでありましたが、今回の事件には一切関知しないことである。と言うことでした。この志学会執行委員会からの要望書と大学側の回答は、学内三叉路に於いて、立て看板で公表されましたが、今回それを掲載致します。

大学側
要望書に答える！

①本学は創立以来、入試要項に記された所定金額以外の金を受け取って入学を許可したことは一度もない

②京都産業大学振興会とは、学校側が年一回神山祭前後にスポーツ等で優秀な成績をおさめた学生を表彰してもらうだけの関係しかない。従って、学校側から振興会に補助金を出したことも無ければ、その逆も全く無い。また、振興会推薦という事実はない。

③A氏の記事に関しては、個人的な事柄であり大学側は関知しないことである。

5月19日付を以って学生部長宛に提出された要望書に対し、去る5月25日学生部長を通して大学側の回答が上記の如く出されました。

志学会執行委員会

（一面よりつづく）

らもその受験勉強でつちかわれた受け身的な学び方から脱しきれないで、能動的に学ぶことを要求される大学の講義が空疎に感じられるのは当然ではないでしょうか。

A　たしかにそういった学生側の態度にも問題があると思います。然し、講義する側にも問題はあるんではないですか。

E　というとどういうことでしょうか。

A　SとかAとかいったランクづけによる成績は何の為にあるんでしょうか。本来的には個々人が勉強の達成度を知る為にあるものだと思うのですが、現状を見ると、S、Aの数は即就職に影響する。単位数とS、Aの数の多さで将来が決定されてしまう。ではいったいぼくは何の為に英文学を勉強しているのか、就職課では三年までに卒業認定単位以上を履修しておかねば就職は望めないと学生にハッパをかけますが、ぼくにしてみれば四年間でもっとゆっくりとマイペースでやりたいんですよ。それに、先生の中にもS、Aと、中味はなくてもいいように言われる人もいるこれではいくらやろうと思ってもいやにもなります。就職の為だけに大学にはいったとは思いたくありませんからね。

「大学の質的変化」

E　現在よく言われるのに大学の就職予備校化というのがありますが、今Aさんが言われたのはそのことだと思いますが、ではそういった予備校化が進む以前の大学とはどういったものだったのでしょうか。また、いつごろから大学の質的変化が起ったのでしょうか。

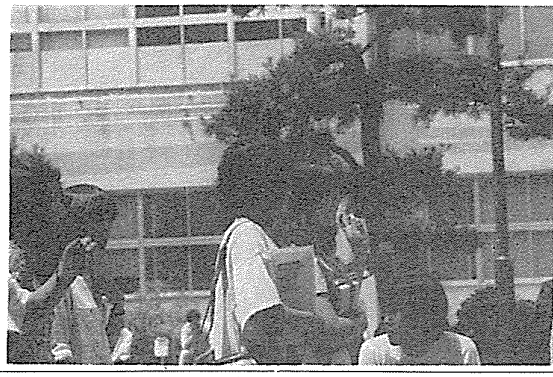
B　旧制高校時代、例えば北杜夫の「ドクトルマンボウ青春記」などを読むと、「つわものどもが夢のあと」的な学生スタイルなり、大学の気風がよくわかりますが、その頃の大学と言えば、真に学問探求の場といった雰囲気があった。今みたいに単位取得に奔走するとか、就職々々と騒ぐということも今程なくて、ゆったりと確かに学問に身をおけた時代だったという感じですね。それは学生の数が今と比べて格段に少なかったというのが一番の原因だと思うんですが。

E　学生数が増えた原因は何でしょう。

A　それはいろんな原因があると思いますが、戦後の高度経済成長の最中であったことなどから、各地で私立の大学、いわゆる駅弁大学ができ、募集人員も年々増加して来た、ということになってマンモス化が起こりそれに見合った施設が私立の場合には特に充分ではないという状況に今あると思います。

C　わたしも同感です。大教室で先生がマイクを持ったり講義する、当然学生一人一人の顔など覚えきれないし、さっきAさんが言われた様に、その上試験の結果が即就職ということっていうのならたしかに何の為に学ぶのかなって疑問です。

E　わたし達は就職の為に学ぶのではないということは就職は最低限度必要な生活手段の確保であってはなかった。自己目標であってもそれはやりがいのある仕事を求めるという方向であって地位とか金もうけの手段としてのみ大学を使う、といったことは相対的に今と比べて少なかった。然し、現在ではそれが第一義的な問題としてあるし、周囲の雰囲気としてもある。食べていく手段を確保するのが厳しい状況は昔も今も変わらない。むしろ今の方が働き口が多いかもしれない。でも、より高い地位、より高い給料をほっするがゆえに激烈な競争を勝ち抜こうとエリートを目指す。ぼくらが教育されて来た受験社会では、少なからず人間性とかいった問題が切り捨てられざるを得ない様に思います。要するに、人間とは何か、その人間である為には社会の中でどう考え、行動すべきかを、学問することを通して身につけていくことが必要だと思うんです。



D　たしかにそうでしょうけど、最低限必要な問題として就職があると言われますが、実際経済的基盤を確保することは不可避的な問題として捉えなければならないし、就職試験の時に要求されることは、まごころとか、友情とかいった人間性よりも如何に能率よく仕事が出来るかといった能力の方ですよ。その能力を計る目安としてSとかAとかの数が重要視される。この冷厳な現実を全く無視することは出来ないのではないですか。だからといって人間性というものを無視してもいいとは言いませんが、その辺のところのバランスをどうとるかではないでしょうか。

C　そうでしょうか。わたしはそうは思えません。だって、人間性といった場合人間と人間との関係に於いてどうすればお互いが生きていけるかという人生を送ることが出来るのかを考えることだと思うんですが、それを就職試験問題の中から得ることはどうしても出来ないと思うんです。以前小学生の男の子が司法試験をパスした話しがありましたけど、聞くと、ものごころつく頃から司法試験の問題をみっちりやって、友だちもほとんど限られていてテレビや本などもほとんどものばかりだった、ということなんですけど、小学生で司法試験にパスすることはその事実だけを見れば、たしかにたいへんなことなんですが、はたして、法律書の上での自然人の認識だけで、生身の人間どうしの交流が少ない人間が、人を裁いたり弁護したりする立場に立てるのでしょうか。六法全書の知識は豊富でしょうが、それだけでは人間として不充分なはずです。

A　今の話しはぼくらにもそのままあてはまると思いますね。友情とか人の生き方とかを考えるということは第一義的には要求されず先ず能力を、という社会的要求がある。その状況で、ぼくらが、単位とか悩まされずに、やりたい学問をマイペースでやるというのはほとんど無理かも知れません。

「やりがいのある職業」

E　今までの内容をまとめてみますと、先ず大学は本来、学問を通して社会的存在としての自己を認識する場として存在したし、そういったことを望む学生も多かった。又、学生が量的にも少なく、教師とのコミュニケーションが持ち易い環境にあったが、現在では、学生数の増加によって教師との接触が昔程ない、せいぜいゼミぐらいなもので、マスプロ講義では到底望めないし教師の方もそういったものと背定的に捉えてしまっている面がないとは言い難い。こういったものの背景として、厳しい就職という現実に対応する為にいわゆる就職試験問題集を買わざるを得ない状況がある。ということですが、或る大学の学生の意識調査によると、やりがいのある仕事を求めているのが全体の七〇％余りあるのに、自分が大学で専攻しているものをいかしたいとするのは二〇％足らずであるという結果が出ています。つまり、やりがいのある仕事に就きたいが今やってる勉強は生かせない、ということなのですが、その二〇％の内わけをみると、経営とか工学部系とかの実職的な勉強をやってる学部学生が多い。一方、法学とか文学部などはいかせないと考える学生が多いんです。この結果から、学問＝技術＝就職の手段という図式が学生の意識にステレオタイプ化されていて、この図式に合わない例えば哲学とか文学とかいったものを専攻している学生の多くは自分のやっていることに空疎感を抱く、といったことが言えると思います。このことから大学の質的な変化の意味が、どういうものであるのかが理解出来たと思います。

A　今や就職を大前提とせずして大学の存在意義を語ることは出来ない、と言っても過言ではない。

C　わたしは教職過程の講義を取っていて、教師を希望しているんですけど、正直言って、安定した職業だからという理由もあることは否めません。

B　教職で思い出したんですが、この前、教職の集中講義が土曜の三講目にあったんですが、講義の最初に黒板に何がかかれたかと言うと、京都府の教員試験問題の写しなんです。はっきり言って驚きました。内容は身障者の人々についてのものだったんですが、しょっぱなから試験問題というのは何かおかしいのではないですか。教師でさえも、それを安定した職業と考える以上は真の教育とは何か

ということよりも、教員試験問題を如何にうまくくぐり抜けるかの方が大切になってくる。こういった考えの人が教壇に立つことを思うと、なんとも言えない気分です。単なる知識の切り売り、それの機械的摂取、こういった関係が教師と学生の関係であるならば、そこに「考える」という過程は不要だし、そうなれば人間疎外へ進む以外なくなってしまう。わたしたちは「考える」ということを余りやらなくなってしまっている気がします。「結果」だけが要求され、その「過程」は要求されない、当然「過程」があってはじめて「結果」があるわけですけど今のテストなどを考えてみると、やはり「結果」だけが問題にされている。問題なのは、その「結果」で将来が決定されてしまうことだと思うんです。

A　しかも、決められた期間内で将来を決めてしまわなければならない。人にはそれぞれペースがあって早い人もいればゆっくりとやる人もいる、なのに今の教育制度は一定の期間を定めてそれを強要する。その結果としての5段階評価とかS、Aとかのランク付けがその人の将来を決めてしまうのならば、たしかに自主性とか独自性というものは抑えられてしまって、同じようなレポートが多出したり、結果だけが問題だけだから、試験前のノートのコピーが常識化してしまったりする。そこに「考える」行為は全く無視されてしまっている。教える側も、毎年同じ様な問題を出して出席さえすればそれでよいといった講義もある。学生側もそれに甘んじている。でもそういった状況が一般化すれば、今、各大学で盛んに言われている学生の自治意識の低迷も当然の帰結でしょうね。

「常識の枠」

B　「考える」という行為が形式化されてしまって、それによる学問の形骸化を感じる、感じないに関らず就職という現実の前で、単位取りに奔走し、四回生は会社まわりに必死になるということになる。「社会にでる」イコール「会社」という常識の枠を敢えて超えようとはせずに、リスクは極力避けようとするわけだけど、ぼくの知っている人に七年間大学にいて、自分の生き方にはっきり納得いくまで考えてみて、現在は二部の高校の教師になっている人がいる。だから大学に長くいてもいいっていうのではなくて、社会＝会社の常識を問い直してみることも必要ではないかと思うんです。

C　私のクラブの先輩にもそういう人がいたんですけど、一度今の社会に出てしまうと、もう道が決められてしまって、なかなか変えることが出来ないでしょ。つまり、あれこれ迷いながらということは出来なくて迷った上でレールにのって後は停年までという感じでだからそれがなかなか決められない人は留年でもやって、あるいは就職浪人をして自分の生き方を考えるということになる。しかし、そういう人を世間では落伍者と呼ぶ。もっと可能性を試す機会があってもいいと思うんです。編入や転部、転学などがもっと自由に出来てもいいんではないですか。

D　こうも言えると思います。社会機構に呑みこまれてしまえば、もう自由がなくなるという悲観感にとらわれてしまっている。でもそういう社会であるからこそ、その中に入ってからも学問、つまり社会的存在としての自己認識するための作業を大学でなくても出来るんだ、という意識革改もぼくらには必要だろうし又、大学を本来的な姿に戻そうとするなら、立教大がやった様な部分的にではあるけれど法学部の入試改革による大衆にひらかれた大学への試み、あるいは公開講座を設けるなどを試みてその中で改めて大学の存在意義を問わなければ、このままでは完全に就職予備校か、スポーツセンター、レジャーセンターになってしまうような気がします。

B　クラブ活動や自治活動それに下宿生活や友達づきあいとかの人間関係を通じて社会的自我意識に目覚めていく、それを土台としてしっかりとした社会観を把むべき知識の収得を、就職の為のみというのではなくて自らの生き方を探る手段として、確実に自分のものにしていきたいですね。

E　様々な価値観が乱立する中にあって大学自体ひとつの価値を形成するわけですが、そこで政治、文化経済といった社会との関係に於いて自分自身の立場なり方向性なりを把握する努力をしなければならない。その為の出発点として大学の存在価値はあり、決して受験競争のゴールとしてあるのではないということでしょうか。今日は御出席下さり皆さんありがとうございました。

《座談会》

今回の座談会では就職という視点から現在の大学像について活発に討論して頂きましたが、これだけでは捉え方が一面的であることは否めないので、今後も別の視点から様々な現代の大学像を浮き彫りにしていくつもりです。

◆書評◆

「第三次世界大戦は始まっている」

那須聖　サンケイ出版

我々日本人は、現実を直視することが不得手なのだろうか。ヨーロッパ人にいたっては〝自分の裏庭に戦車が来る〟といった気持ちで、国際情勢を見守っている。ヨーロッパ人は内戦を数多く体験し、日本人は過去一度もそれを経験したことがない。沖縄は別としても、本土での戦争は経験したことがない。そういったことから、我々は国際情勢と自分達の日常生活とが結びつかず、今の生活を支えている平和というものは、フィクションであるということを自覚していないのではないだろうか。平和というものは、それが国の平和であれ家庭の平和であれ、自分達の手で作り出していくものだということを忘れてはならない。

世界情勢に対して日本人がうといというのには、事実を報道するマスコミにも責任が多分にあると思う。中国のベトナム進攻当時、日本の新聞はほとんどが、江川、グラマンなどで一色にぬりつぶされていた。これは重大なことである。国民の〝知る権利〟を侵害しているとまでは言わないけれども、マスコミは自分達が持っている、世論に対する影響力というものを、もっと考えるようにしてもらいたいものである。

こういったことから、我々は自分の周囲で何が起こっているのかを知りたくてもなかなか知ることが出来ない、といった情報不足による欲求不満に陥りがちになる。幸い、これを解消してくれるような本が出たのでここに紹介しよう。ただし、この本では「事実」は伝えてくれるが、個人の平和感、イデオロギー上の問題にまでは立ち入っていない。それを踏まえた上で読めば、我々に「カンフル注射」並の役割を果たしてくれることは間違いない。

さて、ここでこの本の大まかなあらましを紹介すると次のようになる。

最近、特に中近東ならびにアフリカ諸国での政変が目立つが、著者はこれを第三次世界大戦の〝序盤戦〟とする。すなわち鉱物資源とか石油資源とかいった、資本主義諸国に不足している地下資源を資本主義諸国の手には入らないようにして、その経済を弱体化するといった、共産主義諸国の策略であるとする。

ところがこの策のみでは資本主義諸国に手には入る資源を完全に止めることが出来ないので、次に、資本主義諸国が資源を海外から輸入する海路を、妨害ないし断絶することが必要になる。これが〝中盤戦〟であり、その手段として、北大西洋方面と地中海方面からの西ヨーロッパ包囲締めつけ作戦をもって西側経済を疲弊させた上で、中部ヨーロッパでの〝本盤戦〟には入るというわけである。その時期はソ連の軍事力がピークに達し、最も軍事的に優位にたてる1983年～85年以前とみられる。

著者のいうソ連の戦略、〈序盤戦〉→〈中盤戦〉→〈本盤戦〉は、実によく筋が通っていて、これを現実の世界情勢に照らし合わせてみると、ものごとがよく見えてくる。しかし、我々読者は次のことに留意しなければならない。

一貫して著者は、共産主義諸国の資本主義諸国に対する挑戦として、ソ連の軍備拡張を扱っている。しかし、あまりにもそういった観点から見すぎているため、つい共産主義封じ込めばかりに気を取られ〝パランス・オブ・パワー〟といった国際政治の基礎概念を忘れがちで、グローバルな見方ができていないようである。

それにソ連の軍備拡張政策の原因として、著者が指摘していることの他に〝地政学上〟の問題がある。つまり、ソ連は四方を危険に囲まれ、自然の防衛線を欠いていたという状況から生まれた、防衛的な拡張政策である。また、歴史的にもフン族、ブルガール、アヴァール、カザール、マジャール、ペチェネグ、タタール等の諸民族が次々と侵略し、ロシア人の祖先はこれらの侵略の犠牲者であった、といった史実である。

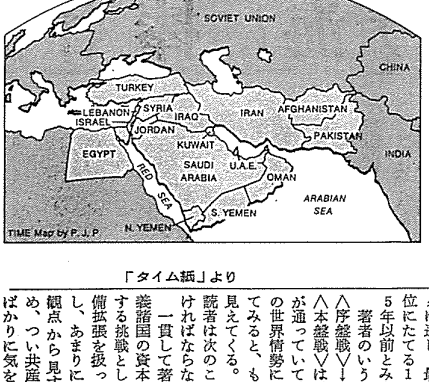
こういったソ連の〝被害妄想狂の国家版〟という性質が、十九世紀になりマルクス主義と結びつき、これが現在の資本主義諸国との対立という形で表われて今日に至ったという考察もできよう。

著者はアメリカの共和党のタカ派に近い考え方をしているが、それを考慮して読めば、実に現在の国際情勢を適格に説明し、近い将来起こるであろうことをも論理的に伝えてくれる本である。

―国際政治の理論は、現実とは関係のないような、ある先入観的な抽象的原理や抽象的概念によって判断されてはならないのであって、その目的によって判断されなければならない。（ハンス・J・モルゲンソー）―

といったモルゲンソーの言葉があるが、いかに事実を把握することが難しいか、ということがこれを見てもわかると思う。

那須　聖（なすきよし）
大正5年生まれ。コロンビア大学で、国際関係論、国際機構論を専攻。毎日新聞社ワシントン特派員、ニューヨーク支局長、外信部副部長、論説委員を歴任。現在ニューヨーク在住。外交評論家、同時にセント・ジョーンズ大学で日本学担当。
主な著書―「国際政治の手引き」「国際連合の全貌」「崩れゆく日米関係」ほか。



「タイム誌」より

クラブ報告

こちら探検部！

我々京都産業大学探検部洞窟班五名は、今春三月十九日～二十六日にかけて、数次に渡る大東諸島（南大東島・北大東島）洞窟調査の第一次調査として、第一次南大東島洞窟調査を行なった。

南大東島概要

南大東島は、沖縄本島の東方約三九〇㎞の太平洋上に浮かぶ絶海の孤島であり、六十余日の難航海を経て上陸、開拓に着手したのが同島開拓の始まりであった。

活動・調査報告

我々は三月十四日に大阪南港を出発し、翌十五日に沖縄那覇新港に到着、十八日に五〇〇㌧たらずの船で沖縄泊港を出発、二十余時間の航海の末、ようやく南大東島の地を踏むことができた。実に長い船旅であった。当初、我々はテントを張り活動を行なう予定であったが、同島では川はなく池之沢地区にしか水道設備がなく、他の地区は天水を使用している為、二年前より神戸から同島に赴き、旅館（同島には二軒ある）をしている神田氏の御好意により、離れを提供して頂きここをベースに活動を行なった。我々は先ず、役場を訪ずれ、我々の調査意図を説明し、洞窟に詳しい水道課の佐藤氏を紹介して頂き、同氏から数多くの情報を得ることができた。

洞窟調査に際しては、調査地域の地質が重要な問題となる。南大東島は隆起環礁の島で、過去三回にわたって珊瑚礁が隆起したものといわれ（これは、我々が調査を行なった洞窟の内部に貝の化石が多数散在していたことからもわかる）、島全体が礁石灰岩からなっている。従って洞窟は、島周囲約二十一㎞の短楕円形で盆地状をなしており、山はなく一番高いところが標高七十五㍍で、島の中央部には数十の池沼が散在している。また、島の周囲が海面上十二、三㍍の断崖になっており、海岸線から内側に二重三重に防潮風林が設置され、耕地を囲んでいる。島の総面積の約六割が農耕地（キビ畑）であり、分蜜工場での精糖業を唯一の産業として島の経済は成り立っている。

また、古来南大東島は、実際に島が発見されるはるか以前より琉球人の間で、神の国「オファアガリ島」として言い伝えられていた。大東諸島が発見されたのは、一八二〇年（文政三年）であり、明治十八年（一八八五年）沖縄県庁の探検により日本国標が建てられ、沖縄県に所属した。それより数年を経て同島の開拓を希望する者が続出し、開拓が試みられたが、島の周囲が断崖の為、上陸できず断念する者、上陸はしたが物資を放置して引き返す者、未雷手のまま断念する者でいづれも失敗に終った。そして明治三十三年（一九〇〇年）、玉置半右衛門が郷里八丈島において同志を募り、沖縄泊港を出発、二十余時間の航海の末、ようやく南大東島の地を踏むことができた。実に長い船旅であった。当初、我々はテントを張り活動を行なう予定であった。同島では川はなく池之沢地区にしか水道設備がなく、他の地区は天水を使用している為、二年前より神戸から同島に赴き、旅館（同島には二軒ある）をしている神田氏の御好意により、離れを提供して頂きここをベースに活動を行なった。我々は先ず、役場を訪ずれ、我々の調査意図を説明し、洞窟に詳しい水道課の佐藤氏を紹介して頂き、同氏から数多くの情報を得ることができた。

洞窟調査に際しては、調査地域の地質が重要な問題となる。南大東島は隆起環礁の島で、過去三回にわたって珊瑚礁が隆起したものといわれ（これは、我々が調査を行なった洞窟の内部に貝の化石が多数散在していたことからもわかる）、島全体が礁石灰岩からなっている。従って洞窟は、島全体にむらなく分布しているものと思われる。事実、佐藤氏の話によると、島内五カ所で四一三㍍の地点までボーリング調査を行なった結果、全て珊瑚礁で岩と岩の間に空間があるとのことであった。

我々が所在を確認できた洞窟は二〇、調査・測量を行なったのは十一である。また、現地の人々の話では一〇〇近くはあるそうである。洞窟の特徴としては、洞口はほとんどが溶食ドリーネ、もしくは陥没地形の中にあり、形態はホール状のものが多い。規模は、我々の調査した範囲では、三〇〇㍍級の星野洞が最長で大規模なものは見られなかった。しかし、二次生成物（鍾乳石）の発達が良く、種類が多く、つらら石・石筍・石柱・カーテン・フローストーン・鍾乳管・洞穴サンゴ・ヘリクタイト等が見られる。我々の調査した洞窟のうち、特に星野洞、玉置洞の二次生成物は素晴しく、星野洞の二次生成物は純白で、長さ三～四㍍、直径三〇～四〇㎝の大石筍群、そして二㍍近くもの鍾乳管が見られる。我々の知るところでは、日本有数の洞窟にはいるのではないかと思われる。また玉置洞は去る大戦の際、日本軍によって発見され軍部の物資貯蔵庫として利用されたとい われ、鍾乳石には「必勝信念」「一致和合」と大きく書かれており、我々を驚かせた。

南大東島における洞窟の最も大きな特徴は、海抜一〇～二〇㍍の低位部（最内部の防潮風林から内側）にある洞窟内において、それらの洞窟の最深部がプールとなり、その中に鍾乳石の一部または全部が水没した状態が見られることである。このことは、同島洞窟調査中に亡くなられた琉球大学講師武永健一郎氏等が、つらら石、石筍、石柱などの生成される過程から考えると、水中においてそれらの二次生成物が生ずることはまず考えられず、従って現在水没している鍾乳石が形成された時代の海水面は、現在の海水面より低位にあった。」と指摘されている。

我々は、今後も機会あるごとに南大東島、及び北大東島において洞窟調査を行なう予定である。

なお、今回の調査に際して、多大な御支援、御協力いただいた神田夫妻、佐藤氏、そして現地の方々に深く感謝致します。

参考文献
○南大東島村勢要覧
○沖縄の自然
「島と自然と鍾乳洞」

「玉置洞」

局員募集！

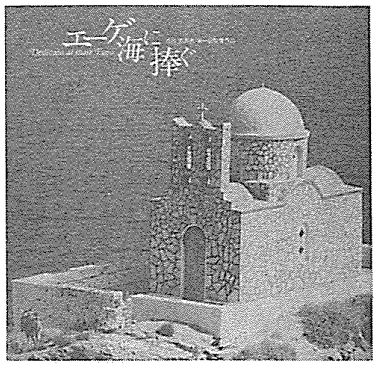
我新聞局は局員を募集しています。
新聞は学園の顔であり、心です。
みんなの手で素晴らしいものにしてゆきましょう。

新入生・二・三回生
7号館4階703BOXへ！
歓迎します。

原稿募集！

広く学友の原稿を募集いたします
更に、学友のみならず、教職員の方々からの原稿も歓迎します。
学内で気が付いた事、詩、旅行記映画・レコード・読書感想文からイラスト・漫画なんでも結構です。
採用の方には映画券または図書券をお礼としてさし上げます。
原稿は学部・学年・住所・氏名を明記の上703BOXまでご持参ください
貴方の素晴らしい原稿をお待ちしております。

《映画評》
エーゲ海に捧ぐ



今回は、今、話題の中心池田満寿夫原作・脚本・監督による「エーゲ海に捧ぐ」をレポートしてきました。レポーターは外国語学部の新入生平賀悦子さんです。

悦子さんは、まだふるさとなまりのぬけきらない初々しいカワイコチャンで、映画レポーター募集に応募くださった動機が、「タダで映画が観にいけるから。」というチャッカリさんです。さて、どうなることやら……。

――映画どうだった？

エッチャン　ウーン。この映画は前から観たいと思ってましたけど、たいしたことない みたい。期待はずれ……。

――どうして？

エッチャン　なんかね、何を言ってるのかサッパリわからんかったし……。話に一本の筋が通ってないって感じがしました。

――前評判だけっていう感じかな？

エッチャン　そうそう。画面がきれい。とかって評判がでてたけど、途中から観てるのがつらかった……。

――セックス・シーンが多かったから？

エッチャン　それもあるけど同性の女の人がおもちゃにされてるみたいでね。

――『さまざまな愛のかたち』って解説してあるけれども、これについてはどう思った？

エッチャン　『愛』みたいなきれいなものではない、と思います。欲望そのもの。でも考えてみたらおもちゃにされたのは女の人じゃなくて、あのニコス（主人公）っていう男の人かもしれんね。うまく言えんけど…。

――パンフレットの映画評には『さまざまな女たちとの出会いと挑発に、性の衝動をぶつけてむさぼって、だが流されて漂って、ついに彼は真実の愛の確認を得ることはない。』ってあるけれども、このことかな？

エッチャン　ああ。それ！映画評論家はさすがにうまく書くね。（笑い）

――解説では池田満寿夫のことを『青春の果てしない欲望と、野心と、そして愛。それらを幾重にも映して、エロスの世界に誘う新しい感性を見いだした。』って形容してるけど、どう思う？

エッチャン　欲望と野心はなんとなくわかるけど……愛はどうかな。あんなのも愛の領域にはいるのかな。『幾重にも映して……』っていうよりも（セックス・シーンを）『何回も映して……』っていうふうに変えたほうがいいのとちがうかな。（笑い）

――スルドイ！

エッチャン　映画の感想を話そうと思っても、話の内容がないっていうか、わかりませんでしたし、感動もなかったからこんなことしか言えないんです。

――たしかに映画評担当者としても「これ、どうしたらいいのかな」って思ったものね。

エッチャン　ニコスがね。良心の呵責を感じてるようなシーンがあったでしょ。リーザ（ニコスの妻の妹）に対して。そこがまだ救われる気がしたけど……。男の人って、みんなあんな感じかな。って思ったりもしました。

――野郎が恐くなった？

エッチャン　そんなこともないけど……。

――世の中にはスケベな野郎も多いから、恋人をさがす時は気をつけてね。僕に相談してくれてもいいし……。（笑い）

エッチャン　ありがとうございます。（笑い）

――最後の方でニコスが夢をみるシーンがあったでしょ。あれは何を意味してるのかな？

エッチャン　お母さんと抱きあってる男が自分であったっていう夢？

――そう。

エッチャン　ウーン。むずかしい。

――パンフレットの映画評読みましょか。『白いテラスにまどろむニコス。彼は貧しい実家に母の姿を探すとき、母は若者に犯され、振り向いた男は、ニコス自身だ。その白昼夢は、何を意味するのだろうか。少年は女に母を求め、母は女と重なって、彼を性と愛と欲望と冒瀆の混乱に、突き落とすのである。』

エッチャン　なるほどねェ。それが「さまざまな愛のかたち」っていうもの？

――さあ。僕にもよくわかりません。でも、野郎の皮をひんむいたら、誰でも結局はそこにいくのかもしれませんね。マザー・コンプレックスはみんなが持ってますから。僕等が芸術を解するだけの眼を持ってないのかな。それとも池田満寿夫は僕等とはちがった感覚の持ち主なのかな……？

エッチャン　せっかく映画を観せてもらったのに、あんまりお役にたてなかったみたい。ごめんね。

――いえいえ、とんでもないです。十分です。こちらこそややこしいことお願いして申しわけありませんでした。どうもありがとう。

エッチャン　ありがとうございました。

かくして楽しいデート、ではなく、取材を終えました。池田さん。十八才の女の子の批評はかなりきびしいですぞ！

平賀さん、大切なお時間を本当にありがとうございました。ホーム・シックなんか吹きとばしてこれからの四年間を有意義におすごしください。新聞局はあなたをバック・アップしますぞ！

クラブだより

スポーツシーズンの到来と共に我が産大の各クラブは次々と優秀なる成績を修めています。

中でも硬式野球部はよく健闘して京滋リーグで完全優勝し、関西六大学野球進出も夢ではなくなりました。今後も全学友の応援を期待します。

また、弓道部もよく健闘して全日本弓道大会で第4位の好成績を修めたことも見逃せませんし、バスケットは関西トーナメントに於て、自転車競技部は新人戦に於て各々優勝を飾りました。

▽硬式野球
京滋リーグ完全優勝
4月9・10日　産大VS京都教育大（産大G）
一回戦　2―1
二回戦　6―1
4月15日　産大VS京大
一回戦3―2（産大G）
4月22日　産大VS京大
二回戦2―1（西京極）
4月4日　産大VS京都外大（産大G）
一回戦　10―3
4月21日　産大VS京都外大（西京極）
二回戦　18―0
4月28・29日　産大VS京都学園大（産大G）
一回戦　8―0
二回戦　10―5
5月12・13日　産大VS仏教大（産大G）
一回戦　4―2
二回戦　3―0
5月19・20日　産大VS竜谷大（竜大G）
一回戦　7―6
二回戦　1―0

▽自転車競技部
サイクルサッカー　新人戦優勝
（大阪大学体育館）
一回戦　産大A（平井・中島）VS桃山学院大B
17―0
二回戦　産大AVS大阪大学A
9―0
準決勝　産大AVS竜谷大学B
7―0
決勝　産大VS桃山学院大A
5―4

▽弓道部
全日本弓道大会（近的の部）4位
5月3日（旧武徳殿）

▽バスケット
関西選手権　5月2～7日　優勝

安い！コピー・サービス始めました

新聞局では、六月から月曜・水曜の昼休み（十二時十五分～一時十分）にBOXに於きましてコピー・サービスを始めました。気軽に御利用下さい。

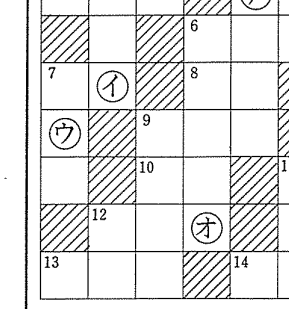
（料金）
サイズ
A　4……一枚　十・五円・
B　4……〃　〃
B　5……〃

クロスワードパズル

㋐から㋙の文字を組み合わせてアルファベットで英単語一つにして、学部、学科、学年、住所、氏名、本紙への御意見、御要望を明記の上左記に御応募下さい。

〆切は6月末日とし、10組20名の方に映画券をさしあげます。（発表は発送をもっておこなう）としどしどし御応募下さい。

応募先　評議会投書箱か直接新聞局BOX（7号館4階703）へどうぞ。



タテのかぎ

②禅寺でくむ
③6月に東京で開かれる
④鳥鼎の料理の臓腑などの称
⑥原子
⑥4回生はそろそろ○○○ー○カット
⑦池田満寿夫の芥川賞受賞作○ー○海に捧ぐ
⑨電線の先につけて電気を導く器具
⑪○○○酒
⑫最近流行の美容術

ヨコのかぎ

①○○○オールスターズ
③首都アビアの島国
⑥限　界
⑦日本の貨幣単位
⑧赤い○○はいてた女の子
⑨戦略兵器制限交渉
⑩ピンクレディー、ミーの相手
⑪○○のあるウイスキー
⑬三角の帆に風を受け水面を行く
⑭中国探題の別称
⑭北大の○○○並木